

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

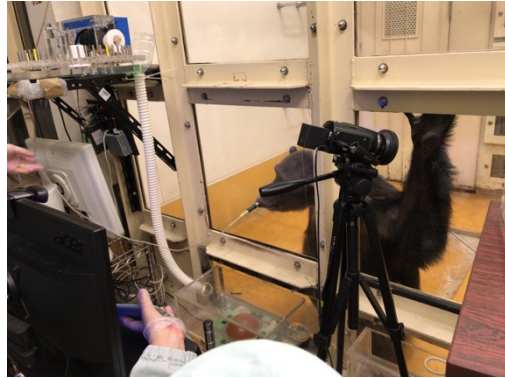
平成 30 年 10 月 1 日	
所属部局・職	野生動物研究センター・修士課程学生
氏名	前田 玉青

<b>1. 派遣国・場所</b> (〇〇国、〇〇地域)
愛知県犬山市
<b>2. 研究課題名</b> (〇〇の調査、および〇〇での実験)
比較認知科学実習
<b>3. 派遣期間</b> (本邦出発から帰国まで)
平成 30 年 9 月 10 日～平成 30 年 9 月 12 日 (3 日間)
<b>4. 主な受入機関及び受入研究者</b> (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
京都大学霊長類研究所、友永雅己教授
<b>5. 所期の目的の遂行状況及び成果</b> (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
今回の実習では、チンパンジーとウマの認知実験の見学をしました。霊長研では多岐にわたる実験が、個体に合わせて設定しており、システムチックかつ円滑に実験が組まれていることが印象的でした。ウマについてはウマとネコの写真を提示し、ウマの写真を選ぶという課題を見学しました。この弁別のトレーニングは、ウマもチンパンジーも、まず〇だけを表示した画面を触れるところから訓練をはじめ、徐々に〇と×等の図形の弁別ができるように課題を少しずつアップグレードしていく、ということをしたそうです。言葉の通じない相手に、実験の意図を理解してもらうために、巧みな課題設定がなされていることがわかりました。しかし、たとえば、人間でも勉強をするとモノの見方が変わるように、このようなトレーニングを繰り返すことで、なにかしら彼らの認知の仕方が変わっていくのではないかと、とも思いました。また、ウマ3頭はほぼ全ての弁別を正解していた一方、チンパンジーでは1人、ゴンという男性は写真の弁別が非常に苦手としていて、チャンスレベルの正答率だったので、少し驚きました。 霊長研でこのような認知実験を間近で観察するのははじめてであったため、非常に勉強になりました。今後、別の実習で熊本サンクチュアリーにも行くので、そこの実験の様子などについて比較できれば良いと考えています。 また、2日目には、日本モンキーセンターの定例会にも参加しました。定例会の最初にはセミナーがあり、モウコノウマの観察報告、ゴロンゴザ国立公園の滞在報告を聞かせていただきました。モウコノウマはいちど野生絶滅したのちに再導入された過去を持ちますが、国立公園内の個体は全て識別され、放牧したイエウマとの交雑を防ぐためにバッファゾーンが設けられている等、かなり保護に力を入れているようでした。ゴロンゴザ国立公園に生息するウォーターバック等もハレムを作り、そのハレムが集まってさらに大きな集団を形成しているという話があり、私自身が研究する野生ウマに似ている社会構造なので、非常に興味深く思いました。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書  
(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



ウマ-ネコの弁別実験にとりくむポニョ



アイトラッカーを使った実験

6. その他 (特記事項など)

謝辞：現地でお世話になった友永先生、松沢先生、ほか霊長研の研究生の方々に感謝申し上げます、